

北海道中央ユーラシア研究会 第108回例会

カルムイク人はどのように定住化したのか
井上岳彦

(北海道大学大学院文学研究科博士後期課程)

日 時：2013年7月14日(日) 15:00-18:30

場 所：北海道大学スラブ研究センター4階小会議室 401

討論者：地田徹朗(北海道大学スラブ研究センターGCOE プロジェクト研究員)

司会者：宇山智彦(北海道大学スラブ研究センター教授)

出席者：15名

<報告要旨>

カルムイク人が社会主義時代にどのように定住化したのかという問いはあまり設定されてこなかった。それは彼らにとって定住化・集団化の後に起こったシベリアへの強制移住(1943年12月27日—1956年3月17日)の方がはるかに重大な出来事だからである。ロシア帝国時代にすでに一部のカルムイク人のあいだで定住生活を送る者が現れており、社会主義的定住化とそれ以前の帝政期の定住化を併せて論じることで牧畜民の定住化という問題をより大きな視点から捉える必要がある。本報告はカルムイク人のあいだで起こった社会経済的な変化をロシア人との接触開始以降の約300年の時間の中で考察し、カルムイク人が定住化する過程を明らかにすることを目的とした。



報告ではロシア帝国時代の変化について次のことを指摘した。第一に、現在「カルムイク人」と呼ばれる人々の祖先の牧地は17世紀前半から1800年までに経度のみならず緯度としても大きく移動した。最終的な牧地となったカスピ海北西岸は牧畜に適さない土地も少なくなく、ロシア当局による移動を制限する統治政策によってカルムイク内部で牧畜の発達する地域と衰退する地域に二つに分かれた。家畜を失った者は漁業労働や製塩業労働に従事するようになった。第二に、牧地環境の変化、ロシア経済圏との接触、ロシア軍との同盟関係はカルムイク人が保有する家畜の種類を大きく変化させた。特に1730-40年代にカルムイク人社会全体に浸透したロシア貨幣経済の影響は非常に大きかった。そして、第三に、19世紀、特に帝政末期に貧富の差が拡大する中で定住家屋が登場した。富裕層の中には木造家屋を建てる者も現れたが、もっとも一般的な形は半地下住居だった。帝国政府がカルムイク人の定住化を推進した部分もあったがそれは限定的であり、帝政期の一部のカルムイク人の定住化は貧困化と結びついて進行したと考えられる。

1920年7月19日にカルムイク自治州樹立が宣言された際に、定住化問題はカルムイク人の「生死の問題」であり緊急の課題と位置づけられた。カルムイク人の定住化は帝政期の定住化の失敗を物語る「反面教師」として位置づけられた。1922年の南部ロシアにおける大

規模な飢饉で定住し農業に取り組む動きが見られたが、カルムイク人の定住化が「完了」したのは全面的集団化と呼ばれる極めて暴力的な集団化、集住化によるものとされている。しかし、その実態については未だ不明な部分が多くその解明は今後の課題となる。

【記：井上】

<参加記>

討論者である地田徹朗氏は、カルムイク人と同じく遊牧社会を持つカザフとの比較を念頭にコメントを述べた。地田氏はコメントにおいて社会主義期カザフ人社会の定住化・集団化をめぐる状況と先行研究の整理



を簡潔に行ったうえで、カルムイクアでの「集団化」「定住化」が何を意味しており、何を目的とするものだったかを問うた。そして、この点を明らかにするために、報告で用いられた「遊牧」「定住」といった用語の概念整理や、集団化・定住化をめぐるソ連全体の文脈とカルムイクア独自の文脈を、時系列でより丁寧に整理する必要性を説いた。

フロアからは、定住へと向かう動きをより多面的にとらえるべきとの意見や、集住の重要性を指摘するコメント、さらには冬営地と定住地との関係など、「定住」の考察に関係する議論が出された。また、帝政期からソ連期にかけての地域内の差を軸とした議論の可能性についてのコメントが寄せられた。ソ連史の観点からは、自治領域内の人口移動に関して、定住化と同時に集団化が行われたことに注目すべきとする意見や、生業の変化も政策的に志向されたのかといった質問、また、自治共和国への昇格がカルムイク人およびその国民統合にどのような意味があったのかを問う声もあった。

報告者の井上氏はこれまで帝政期を主な研究対象としてきたが、本報告はソ連期も視野に入れた非常に意欲的なものであり、予定の時間を超えて議論が続く大変刺激的な例会であった。

【記：立花優（北海学園大学非常勤講師）】